過去の【今月のコラム】

2022年１２月:コラム

「人権カレンダー」

12月の担当ということですっかり油断していたコラム。先月初頭に入稿依頼のメールをいただいたときに、「ひゃっ」と悲鳴をあげカレンダーを3度見しました。まさに“光陰矢のごとし”もう年末ですね。

はや45回も繰り返しているのに、やはり今年も一年の過ぎる速さに驚かされます。

6月のコラムにある「ジャネの法則」によると、年を重ねるごとに過ぎ去るのも早くなるとのことなので、今後は更にジェットコースターの様に時が過ぎていくのでしょう。おっちゃんも時を駆けることが出来るようです。

(詳しくは6月「時の記念日」をご参照下さい。)

今回コラムを担当させていただきます、大阪で障害児通所支援事業所の運営を中心に活動しているNPO法人オルケスタの“おっちゃん”こと横山真司です。大阪では、身近な中年男性のことを親しみを込めて「おっちゃん」と呼びます。似ている言葉に「おっさん」がありますが、こちらは親しみが込められていませんので呼ばれたとしても私は振り向きません。なお、お寺のお坊さんもアクセント違いで「おっさん」と呼びます。

さて、今回のテーマは“人権カレンダー”。皆さんにとっては身近なものでしょうか?
私は恥ずかしながら初めて目を通しました。国連やWHO、国内の省庁など、様々な機関が定めている人権についての啓発デーや週間、月間をまとめている人権カレンダーですが、発行元によってその内容は様々なようです。ところ変われば品変わるのは、言葉も人権カレンダーも同じようです。

今回は私が住む大阪府河内長野市のカレンダーを例に、感じたことをつらつらとまとめてみました。

まず、全体をぱっと見渡して印象的だったのが〇〇月間、〇〇週間の多さです。内容も多岐に渡っていて、特に『侵略による罪のない幼児犠牲者の国際デー』、『児童労働反対世界デー』の文字にはドキッとしました。世界を見渡すと紛争が無い時代というものは無く、特に今年は毎日のように悲惨なニュースが届いています。もちろんそこに住む子どもたちは常に命の危険にさらされているのですが、毎日のことになると少しずつその衝撃にも慣れつつあります。また、貧困などの環境によって、危険で有害な労働に従事せざるを得ない子どもたちが世界には9人に1人の割合でいるそうです。それもいつかどこかで聞いたことがあるように思いますが、日常生活の中ではすっかり忘れてしまっていました。人権カレンダーには啓発アクションを起こす合図としての役割がありますが、特別な1日、特別な週間のためだけではなく、日常の中でふと目に入り、ふとその事柄に心を向け、ふと他者に心を向けるきっかけの役割として、より身近にあることが大切なように感じました。

ちなみに、私が数年来地域で取り組んできた4月2日の『自閉症啓発デー』や『発達障害啓発週間』はカレンダーに載ってすらいませんでした。「もう少しこっちを向いてよ!」と叫んでも、いま一つ関心を向けてもらえない地域や行政に不満を感じたりもしていましたが、なるほどこれだけの人権啓発活動がある中で、カレンダーに載ってすらいない事柄に関心を引き付けるのは簡単じゃないことがわかりました。

急がば回れのことわざにならい、カレンダー掲載を直近の目標にして啓発活動の作戦の練り直しをしようと思います。

他に子どもSTに関係しそうなものを...と調べていたところ、子どもの世界的な相互理解と子どもの福祉を増進させることを目的として1954年に制定された『世界こどもの日(国際デーは11月20日)』というものを見つけました。各国での日付は政府に委ねられていて、日本では5月5日こどもの日が当てられているそうです。

世界こどもの日は、第一次世界大戦で多くの子どもが犠牲になったことで始まった子どもの権利を擁護する活動が発展する中で制定されたそうですが、子どもについての相互理解と福祉の増進という目的は、まさに誰一人取り残されない社会を目指すSDGs、そして日本の教育が力を注ぐインクルーシブ教育システムとも同じ方向を示していると思います。インクルーシブ教育についてはここでは割愛しますが、“子どもの人権”という

視点から語られる機会がもっと増えることで、個別最適でありつつインクルーシブな教育に進む可能性が拡がるのではないかなと思いました。

　他にも、障がい者雇用支援月間、世界メンタルヘルスデーなど、人権カレンダーには初めて知る事、興味深いものがいくつかありましたが、長くなってきましたのでコラムはここまでにしたいと思います。

　最後に、時間感覚は“時に注意を向ける回数”、“身体的代謝”、“体験される出来事の数”も影響するそうです。
　「私も一年が飛ぶように過ぎてしまうよ」という方は、人権カレンダーに注目し、その内容についてアクティブに、体験を通して学んでみてはいかがでしょうか?
　12月3日から9日までの1週間は「障害者週間」です。まずはここから。

参考　河内長野市人権協会 人権カレンダー
　　公益社団法人日本ユニセフ協会
　　公益社団法人日本心理学会 心理学Q&A

2022年12月 子どもの発達支援を考えるSTの会 運営委員 横山真司

2022年１１月:コラム

会報の編集に関わって学んだこと(視点の切り替え?)

今年も会報の第13号が出来上がり、そろそろ到着していることでしょう。読みごたえがありますね。私も編集の端っこで、校正の仕事に少しだけ参加させていただきました。原稿を一番先に読ませていただく幸せ。ともすると「読者の目」で読み進めてしまい、誤字脱字も気づかずに内容を読み込んでいて、「あ、これではいけない!」、とまたはじめから読み直したものです。どの原稿も興味深いものですから、内容を読むのではなく、「校正の目」になることが、私にはとても苦手なことでした。

雑誌の編集をしていた亡き夫に「君は本当に校正の仕事に向いてないね」と言われてしまった過去があります。そんな私でしたが、「校正の目」を意識して、なんとか少し以前よりは、校正=読みやすい文にすることに、お手伝いできるようになったかなと思います。編集に関わらせていただき感謝しております。

視点を切り替えるということ…おかげさまで他でもこれに気づかされたことがありました。

自己紹介になりますが、私がSTになったのは特別支援学校の教員の時でした。肢体不自由支援学校で、特に医療的ケアを必要とするお子さんの担当が続いていて、毎日元気に下校してもらうことに100%の神経を使っている頃でした。教育の現場で、教育者として〇〇ちゃんに何をしてあげられたのかなあ、と考える中で、ことばを教えることができないだろうかと悩んでいるときに、言語聴覚士という仕事を知りました。

教員をやめて、養成校に入ろうかと思った時に、柏木敏弘先生の書かれた「言語聴覚士の仕事」の本に出会いました。そして、その中で国家資格になったところで5年間の特別措置で国家試験の受験資格ができることも知りました。そこから、STの先輩のご指導も受けて、独習し、2年がかりでやっと国家試験に合格してSTとなりました。支援学校の中にある自立活動という部署で言語指導担当という仕事にもつかせてもらい、教員退職後も支援学校への外部専門家という仕事をさせていただき、教育現場とつながっています。

医療的ケアの必要な方々へのコミュニケーション支援はなかなかに難しいですが、ICT機器の使用で、現在は視線入力なども導入されて進んできているようです。また、私の地域には支援学校を卒業した方々への訪問学級(重度障害者の生涯学習)があり、やはりICT機器を使ったり、絵本を読んだり、外出の支援をしたりして学習の継続をしています。学校での教育を地域から社会に見直す経験(視点の切り替え?)もさせていただいています。

支援学校の後、支援学級においても仕事をいただき、そこで読み書き障害のお子さんに出会ってから、通常学級での読み書き困難の方への支援がなかなか行き届いていないことを実感しました。そこで、支援学級に関わりのあった若いSTの方と一緒に読み書き支援グループを作ろうと鋭意努力中です。

その中で、「ディスレクシアだから大丈夫」という本に出会い、ディスレクシアは脳の特異性で、これは障害ではなく別のタイプの脳である、という認識で対応するという視点をもらいました。最近の私にとってのベスト「目からウロコ」です。長い人類の進化の過程で出来上がってきた脳で、たかだか発明から5000年の文字のことが合わない脳もあって当然という視点は、とてもワクワクする考え方だと思います。そしてまた、デジタルの進んでいく昨今、文字が出てきたときと同じように、デジタルに対しても向かない脳がありうるかも?

皆様どうお感じになりますか?

参考：「ディスレクシアだから大丈夫！：視点を変えると見えてくる特異性と才能 」,2021.10.19 ,
ブロック・L.アイディ, ファーネット・F.アイディ(著),藤堂栄子(監修, 翻訳),辻佑子,成田あゆみ(翻訳),金子書房

「デジタルで読む脳 × 紙の本で読む脳 ：「深い読み」ができるバイリテラシー脳を育てる」,2020.2.6 ,
メアリアン・ウルフ(著),大田直子(翻訳),インターシフト(合同出版)

2022年11月　子どもの発達支援を考えるSTの会 会報編集委員

2022年１０月:コラム

「ST+保育者、“甘え”を考える」

私はSTとして重症心身障害児施設や療育施設で7年間突っ走ってきました。
現在は、幼稚園の保育者として、毎日子どもたちと生活を共にしています。

私が勤務する幼稚園の保育は、「子ども一人一人を大切に、ありのままの姿を受け入れ、育んでいく」ことを中心においています。中川信子先生の著作『発達障害とことばの相談』(小学館)の中に、『ひとりずつを大切にする、それがスペシャルな教育』というお話があります。「本来、教育においてはひとりずつの興味、ひとりずつの能力に合わせた教育をするもの」と三木安正先生のお考えが書かれています。深い共感を覚えました。STも保育も目指すところは子どもの健やかな育ちです。それぞれ登山道は違うけれど、同じ頂上に向かっているのだから、私でも何かやれるかもしれないと、背中を押されたのでした。そういうわけで、私は経験年数たった半年の「見た目はベテラン、中身は新人」の保育者です。このフレッシュな時期に文章を残したいと思います。

1学期の間、よく泣くある子どもに対して、少し厳しくしていました。こだわりからくる涙であると評価していたからです。ここで子どもの意に沿えば、次の要求が手に負えなくなるかもしれないと感じたのです。ある日、泣き止まない子どもを見かねた主任に「私に免じて甘えさせてあげてね」と言われました。このとき、「甘え」について考える機会が与えられました。それからずっと、心に小さな灯火がゆらゆらしています。

日常を振り返ると、幼稚園の子どもたちはとても甘えます。「抱っこして」「ご飯食べさせて」「一緒に遊んで」「膝に座らせて」(自然と私の膝に座ります)、挙げればキリがないほどです。しかし、今思えば療育に来ていた子どもたちは甘える姿をあまり見せませんでした。共に過ごす時間が短いことやこちらの問題もあるでしょうが、人間関係をつくることが苦手ということも関係あるのかと感じました。コミュニケーションをしている相手の気持ちを理解しにくいお子さんがいますから、相手の好意をあてにすることも難しいのではないでしょうか。

子どもが甘えてきたら、存分に甘えさせたほうが良いという話はよく聞きます。しかし、子どもたちの「甘え」に対する大人の対応によって、自立にも危うい育ちにも繋がります。大人自身のために「甘やかす」のではなく、子どもから出てくる自然な「甘え」が必要です。自然な「甘え」を引き出せるように、私の武器である2つの視点を駆使します。漠然としていますが、次のように言えると思います。

STが先行すれば、子どもたちの「未来」を予測して「今」を過ごし、保育者が先行すれば、子どもたちの「過去」をつくるために「今」を過ごします。

2つの視点があることで、彼らがより良く「自分」を生きていくサポートができればと思います。まだまだ失敗ばかりですが、同じ失敗は繰り返さないように、そして2つの視点を行き来しながら、子どもたちと過ごす日々を楽しみたいです。

2022年10月 子どもの発達支援を考えるSTの会 運営委員

2022年9月:コラム

「戦争が町にやってくる」

タイトルだけ見ると物々しいのですが、絵本のタイトルと言えばピンと来る方もいらっしゃると思います。原題は「THE WAR THAT CHANGED RONDO」。
ウクライナの「ロマナ・ロマニーシン」さんと「アンドリ-・レシヴ」さん作の物です。
この絵本は、2014年のクリミア侵攻の際に、戦争をテーマに親子でじっくり語る子どもの本をつくろうと出版されたのですが、最近のウクライナ情勢のこともあって、2022年に日本語版が「金原瑞人」氏による翻訳でブロンズ新社からタイトルの書名で出版されました。
https://www.bronze.co.jp/books/9784893097095/

少し文字が多いのですが、独特の絵と色使いが子どもたちにも何かを感じさせるように描かれています。

戦争関連で言うと、日本でも憲法の条文に合わせて、「かこさとし」さんや「せなけいこ」さん、「松谷みよ子」さんなど、総勢61人もの絵本作家が1枚ずつイラストを描いた、大月書店の「戦争なんか大きらい! 絵描きたちのメッセージ」http://www.otsukishoten.co.jp/book/b373072.html　という本も2018年に出版されています。上記リンクから試し読みもできます。これだけの著名な絵本作家さんが勢揃いした本は貴重ですし、イラストもそれぞれの作家さんの思いがにじみ出る物となっています。平和を願う気持ちは全世界共通だと思いますし、少し年齢が高いお子さんとなら、親子で語り合うこともできると思います。

と言うことで、今月のコラムのテーマは「絵本について」です。

まずは私ごとになりますが、娘と息子が保育園時代には、月に一度県で一番大きな図書館へ連れて行って、いろいろな絵本を見たり一緒に読んだりして、気に入った本を借りていました。(1か月10冊まで借りられたのはよかった!)
その中でもすごく好きになった物は買って、飽きるまで読んでいました。私も影響を受けて大好きになったのは、文溪堂の「バムとケロ」シリーズ。https://www.bamkero.com/index.html
同じ作家「島田ゆか」さんのガラコシリーズも大好きで、本当は全てを一気に大人買いしたかったのですが、それでは大人げないと思い、子どもの誕生日などのイベントごとに増やしていきました。
面白かったのが、ページページにいろいろな小道具のような物が描かれており、読む度に子どもらが新しい発見をする。または、前に発見したところをもう1度再発見することでした。私もついつい夢中になって宝探しのように本の中をのぞき込んでいました。
子どもたちがだんだん大きくなり、小学校低学年ぐらいになると、私の付き合いで図書館に行く感じになってきてしまったので、そこで親子での図書館は卒業。後は自分たちに任せることにしました。でも自分の用事で本屋に行くときは、一緒に行かないか声をかけていましたが・・・。

保育園や幼稚園では、よい絵本の読み聞かせ方というのがあるようで、昔、講習会で教えてもらったことがあります。これはこれで、集団の中でどう提示するのがよいか、声の大きさはどうかなど参考になるお話もたくさんありました。
ただ、どうしても大人は子どもたちに絵本を使って、何かを教えなくては!と思いがちです。もっと素朴に絵本を介しながら子どもたちとの会話を楽しむ、考え合うことから始めてみるのはいかがでしょうか。義務から楽しみへの方向転換です。

そのためには、まずは大人が絵本や本を好きになり、楽しげに、または一生懸命真剣に読んでいる姿を見せることが一番の近道です。紙の本の販売は年々下がっており、町の大きな本屋さんもドンドン少なくなっています。これはとても嘆かわしいことだと思っています。
季節はもう秋がすぐそこまできています。今年は「読書の秋」を満喫されてはいかがでしょうか。

2022年9月 子どもの発達支援を考えるSTの会 運営委員

2022年8月:コラム

「旅するSTのひとり言」

札幌を中心に全国を旅する子どもSTの大塚紗弓です。今月5本目のフライトとなる新千歳から羽田へ向かう機内でこのコラムを書いています。私は元々、北海道内の児童デイサービスや子ども発達支援センターの立ち上げや専門学校の教員をしておりました。中川信子先生には10年以上前に北海道の片田舎、新冠(読めたら北海道難読地名検定1級です)へ講演に来ていただいたことがあり、そこからのご縁で子どもST会の名ばかりですが運営委員を仰せつかっております。

而立の年に独立し、現在は健康面、経済面、精神面など多角的な子育て支援事業や、再生医療関連の医療機器の取り扱い等を手掛けています。プライベートではセルフ精子提供で授かった2人の息子たちを未婚で育てる「戦略的シングルマザー」です。しばしばメディアに取り上げていただくことがありますので、その度に知名度向上に一役買えればと「小児専門の言語聴覚士です!」とお伝えし、会の広報担当として首の皮一枚ですが関わらせていただいております。

今回は貴重な機会を頂きましたので、皆様もきっと感じているこのコロナ禍における子ども達の育ちへの危機的な影響について私の考えを述べさせていただきたいと思います。

まずはマスクの影響についてです。最初に感じたのは「口腔内衛生の悪化」でした。口臭が強くなり虫歯の進行が早いと感じます。歯科受診も「不要不急」と親御さんが尻込みしているケースも多く見られました。歯磨きをしていたらSTの時間がなくなるので、歯科衛生士とタッグを組んで一緒に訪問へ行っています。

次に、小児にも過剰で根拠に欠ける感染対策が横行し、開口・流涎のあるお子さんに対してまでほぼ強制的にマスクを着用させている事業所が目立ちます。その理由も全て大人の都合によるもので真に子どもの発達を考えた対策ではありません。ただでさえここ3年は家族以外の口元を見たことがない子どもたち。せめて私のSTの時間だけはと、施設と親御さんの許可をいただいて私も含めノーマスクで本来の生のコミュニケーションを大切にしています。きっと近い将来でノーマスクの世の中になることを切に望んではいますが、今言語発達の最中である子ども達を無視することは到底できません。どのお子さんにとっても健全な言語発達の環境をいかに確保するかが現在のSTのキーポイントですので「言い訳しないSTスタイル」を貫いています。

さて、話はガラリと変わりますが、発達障がいの根本治療に自己幹細胞を用いた再生医療が適応されているのをご存知でしょうか。米デューク大学では自閉スペクトラム障がい児へ幹細胞治療を施したところ、視線が合う、言語表出が促進されるなどの劇的な効果が得られたとのことです。「生まれつきだから治るものではない」と環境調整や対症療法が中心となることが多い教育分野。今までも食養生などで体質改善することで状態が良くなることはありましたが、これからは遺伝子治療再生医療の発展により治療可能な疾患の幅が大きくなります。

SDGsと同じグローバル目標の1つであるムーンショット計画には、「2040年までに負荷を感じないリハビリによって身体機能を回復させることができる社会を目指す」と明記されています。私たちの職域も大きく変化する時代へ突入しています。人間の身体はまだまだわからないことだらけで可能性に満ち溢れています。専門家として常に最新の知見に目を向けながら子ども達の成長に負けないように日進月歩したいものですね

※上記の「治す」という部分については、医学的な見地からのことばであり、障害について多様性の尊重、違いを認め、人間を優劣で見ないという考え方を否定するものではありません。
ご理解いただきますようお願いいたします。

2022年8月 子どもの発達支援を考えるSTの会 運営委員 大塚 紗弓

2022年7月:コラム

「運営委員新メンバーより一言」

皆様初めまして。今年度より運営委員に加わったばかりでコラム執筆も拝命し、身に余る光栄と気が引き締まる思いのSNS担当です。

朝4時の薄明かりの中、私はベッドでスマホに文字を打ち込む、というスタイルでこのコラムを書いています。本来はパソコンの前に座ってああでもないこうでもないと熟考しながら書き進めたいのですが、今の私にはそれが難しい事情があります。と言うのも、今年3月に次男を出産し、ただ今絶賛授乳期間中なのです。寝不足で仕方なかったピークは越えたものの、夜中のふにゃふにゃ声で目が覚めて授乳をして、という赤ちゃんに合わせた生活を送っています。もちろん日中も3時間おきの授乳とお世話に追われ、ハッと気付いたらもう長男の保育園のお迎えの時間!という日々。まさに楽しさと苦しさが共存する「たのくるしい」時を過ごしております。

どうしてそんな生活が待っていると予測できたのに、今回運営委員のSNS担当に手を挙げようと思ったか。それはこの会が未来のSTにとって非常に大切な繋がりになるだろうと予想しており、もっと早く、そして多くのSTに認知してもらいたいという気持ちがあったからです。そのために私のこれまでの経験が活かせるのではないかと思いました。

コロナ禍で図らずも加速したオンライン化は、多くの孤独を救ってくれています。子ども分野のSTは、元々の人数の少なさから一人職場や上司と年次が離れているなど孤独を感じることも多いのではないでしょうか。地域によっては、顔が見える横の繋がりを持つことが難しい方もいらっしゃると思います。それらを解消する一助になるもの、それがSNSだと思うのです。これから先現場に出られる方たちの多くは生まれた時からSNSに親しんできた世代ですし、分からないことがあればSNSで検索します。そしてその方たちこそ、働き始めて孤独感と不安を抱えやすいと思いますので、未来の会員へのメッセージをSNSを通じて伝えていきたいと考えています。

私は約2年前から徐々に、Instagramをはじめとする情報発信の媒体を増やしてきました。これらの発信のおかげで出会えた沢山の方々のおかげで、孤独な育児を脱することができています。最初は自分の学びのためのアウトプットとして始めたものですが、今はそれだけでなく「STはここにいるよ」と社会に存在をアピールする意味でも発信する意義があると感じるようになりました。私たち子ども分野のSTは現状として、親御さんから「どこにいるのか分からない」と言われることが多いですよね。医療現場で働く割合が多く自由な発信がしにくいという事情も関係しているかもしれませんが、社会が見つけてくれるまで待つのではなく、自分たちから発信して届けることをもっと増やしていくべきだと思っています。親御さんたちが頑張って探さないと見つけられないという状況を変えていきたいのです。

どの媒体にも共通する「多くの人に見られる発信」には1つ大きなポイントがあります。それは「問題を解決できる発信」です。人は解決したい問題を抱えている場合に、その問題を解決してくれそうな情報を取りにいこうとしますよね。ということは、多くの人にリーチするためにはこの会に対する疑問にお答えしていくことが重要になってきます。そういった疑問・質問のお声を拾うためにもSNSを活用していきたいと考えていますし、多くの方と交流をしながら繋がりを深めていくきっかけ作りになればと思っております。ぜひTwitter・Facebook・Instagramの公式アカウントのフォロー、よろしくお願いいたします！

◆Twitter：https://twitter.com/kodomost2022
◆Facebook：https://www.facebook.com/kodomost2022
◆Instagram：https://www.instagram.com/kodomost2022/
アカウント名はいずれも【 kodomost2022 】です。

2022年7月 子どもの発達支援を考えるSTの会 運営委員 SNS担当

2022年6月:コラム

『時の記念日』

2022年が始まってから半年が経とうとしていることに気が付き、「もう半年！」と時間の流れの速さを痛感しています。毎日何かの記念日ですが、みなさまは６月10日が『時の記念日』だということをご存じでしょうか。

671年（旧暦：天智10年4月25日）『日本書紀』によると、天智天皇がこの日、漏刻（水時計）と鐘鼓（しょうこ）によって初めて時を知らせたとされる。その日を太陽暦に換算して、6月10日が「時の記念日」と定められた。（引用：今日は何の日 6/10）

東京天文台と生活改善同盟会が、「時間をきちんと守り、欧米並みに生活の改善・合理化を図ろう」と1920年に制定されたそうです。

「歳月人を待たず」「光陰矢の如し」など時間にまつわることわざも多数存在しており、私たちの祖先は古くから時間や時間の流れ方を意識しており、現代を生きる多くの方にもそういった意識が存在しているのではないでしょうか。

私の感覚では、年を重ねるごとに1年の過ぎる速度がより速くなっているように感じています。皆さまはいかがでしょうか。

この感覚に対して哲学者ポール・ジャネが提唱し、その甥の心理学者ピエール・ジャネが著書で紹介したのが「ジャネーの法則（ジャネの法則）」というものです。国立国会図書館が全国の図書館等と協同で構築する調べ物のための検索サービス レファレンス協同データベース によると、ジャネーの法則とは、『主観的に記憶表象される年月の長さは、生活年齢に反比例して、年少者にはより長く、年長者では短く評価されるという』ものです。50歳の人にとっての１年は人生の50分の1ですが、5歳の人にとっての１年は人生の5分の1に相当します。生きてきた年数によって1年の相対的な長さがどんどん小さくなるため、時間の経過が早く感じるのだとか…。

私がこの法則の存在を知ったのは今年に入ってから、つい最近のことでした。「へ～…そんな法則があるんだ…」という軽い感想から始まり、「確かに、小学生の頃は1日がもっと長かった…。毎日いろいろなことがあったな…」と、好きな人と話ができて嬉しかったこと、友だちとケンカをしてつらい思いをしたこと、くだらない話でお腹を抱えて笑ったことなど、今の生活との“質”の違いに気が付きました。

子どもの頃は学校では友だちや先生との関りがあり、得手不得手関係なく授業を受けて宿題に取りくんだり、学校外では習い事、塾、友だちや兄弟姉妹とあそんだりと、新しいこととの出会い（経験）が多く、自分から行動を起こさずとも次から次へと何かしらの刺激が入ってきます。一方で、大人になると多くの人が自分の行動はすべて自己選択し自己決定しています。嫌な人とは無理に付き合わなくてもいいし、無理に勉強をする必要もないし、自分の時間は自分で好きに使えるようになるのです。慣れ親しんだルーティンで日々の生活を送ることは、穏やかさを感じることのできる一つの選択かと思います。

私の仕事の休日は、平日に1日と日曜日の週休2日です。休みの日の過ごし方はほぼ一定で、犬の散歩と家事を済ませると、あとは自由な時間となっています。たまには友人や家族と出かけることもありますが、もともとインドア派ということもあり、自宅で過ごすことに安らぎを感じています。しかし、安らいでいる反面、「何もせずに１日が終わった」と思う日が少なくないのも事実でした。

この『ジャネーの法則』との出会いは、私の時間の使い方を振り返る契機となったと感じています。慣れた流れに身を委ねすぎて「何もせずに１日が終わった」と思う日が少しでも少なくなるよう、スキルアップをしたい！という思いから、今年度の子どもSTの会の運営委員にも立候補させていただきました。

これから仕事やプライベートなど、様々なことのバランスを取りながら、スキルアップや人間力の向上を目指していきたいと思っております。みなさまも『時の記念日』を前に、時間の使い方について一度考えてみるのはいかがでしょうか。2022年が思い出に残る一年になりますよう、願っております。

２０２２年６月　子どもの発達支援を考えるＳＴの会　コラム担当

2022年5月:コラム

「他者を動かす力」

本来であれば5月のこの欄は、会費徴収システムのトラブル復旧のお知らせを掲載する予定でしたが、未だめどがたっていない状態です。
頻繁に情報が変わる可能性を考え、上記バナーからの情報を定期的にご覧いただければと思います。このように長期にわたってご心配、ご不便をおかけし申し訳ありません。

今月、せっかくこの場を提供いただいているので、タイトルのことについて少し考えてみたいと思います。
私は、自分以外の人に「こうして欲しい」と思ったように動いてもらうには大きく2つの方法があると考えています。1つは、今世界的に問題になっている戦争に代表される、武力、圧力、暴力等による方法。 学校現場では、「体罰」と言われるような方法です。確かにこの方法は程度にもよりますが、手っ取り早く相手を思うように動かすことはできるかも知れません。でも、その脅威がなくなれば元に戻ります。相手自身が納得して自分から動いていないからだと言うことは皆さんもお分かりでしょう。
30年前、大学を出たばかりの頃、先輩から「ADLということばは早くなくしたい。」と言われたことがあります。そのときにはすぐには理解できませんでしたが、その後、ADL向上のためのクンレンと称し、障がいのあるお子さんが辛い思いをしながら日常生活を自分で行うために日々を過ごしている姿から、QOLあってのADLなんだと思うまでには時間がかかりました。
最近は、「あなたのためだから」と言って、厳しいクンレンを強いられることは減ってきてはいるもののまだまだ残っているのではないかと危惧しています。
もう1つの方法は、「この人の話なら聞き入れてもいい」という、信頼関係を築くことだと思います。これはすごく時間がかかります。コツコツと積み上げて行くしかないからです。
積み上げても重大なミスをおかせば一瞬で崩れ去ってしまうのは、今回のカード情報漏洩でも学んだことです。幸い、皆さまのご理解のおかげで「心配による質問」は多く寄せられている中、「苦情」が出ていないのはたいへんありがたいことと感謝しております。
ことばでは簡単ですが、どうしたら信頼関係を築くことができるか? ここは結果を出すことが1つの一因と考えています。私のように学校職員は、持ち上がりを前提としなければ1年間という期間で結果を出すことが求められます。ここはSTさんたちとの大きな違いと思います。
私自身、今までに信頼を崩してしまった失敗経験もあります。しかし、ピッタリの支援方法が見つかれば、どんな重度障がいのあるお子さんでも1年の間に心地よい表情を見せたり、笑顔になることがを増えたりするのも実感しています。
5月連休明け、いよいよ新年度が本格的にスタートするにあたり、自戒の念も込め、改めて今年度の計画を考えていきたいと思っています。

2022年5月 子どもの発達支援を考えるSTの会
会員・システム担当

2022年4月:コラム

「新年度、一歩前へ」

私は1973年からST(Speech Therapist)をしています。
ST歴は今年で49年、来年で50年になります。
STとしてはまだまだ未熟者の自覚がありますが、「STって仕事はすばらしい!おもしろい!楽しい!」という気持ちをずっと持ち続けられたのは実に幸せなことです。
諸先生や先輩方、そして仲間たちのおかげと、感謝にたえません。

1960年代、アメリカで言語病理学を勉強して帰国したST分野の大先輩たちによって日本でのSTの活動が始まりました。
1971年、新宿区早稲田に「国立聴力言語障害センター附属聴能言語専門職員養成所」ができ、日本初のSTの系統的養成が始まりました。
なお、上記養成所はその後所沢に移転、国立障害者リハビリテーションセンター学院の中の言語聴覚学科へと発展し、大卒者対象2年間の養成施設になりました。
http://www.rehab.go.jp/College/japanese/
養成は始まったものの、公的に定められた資格はなく、「言語治療士」「言語療法士」「聴能言語士」「臨床言語士」など、いろいろな名前が併存する時期が長く続きました。

一方、教育分野では保護者の要望を受けて1950年代から各地に「きこえの教室」「ことばの教室」の創設が始まり、「きこえとことばの先生」が大きなはたらきをしていました。現在は全国公立学校難聴言語障害教育研究協議会(全難言協)のもとに集い、研究・実践活動を続けています
http://www.zennangen.com/

その後、紆余曲折をへて1997年、厚生労働省管轄の医療職として言語聴覚士(ST)の国家資格が成立し、資格取得者は「言語聴覚士」と呼ばれるようになりました。
子ども分野の言語聴覚士の業務は、実は、教育分野の「きこえとことばの教室」の先生方の業務と重なる部分も多いのですが、医療職として養成され、短期間に明確な成果をあげなければならないという使命感から、お子さんの現状に合わない無理な訓練に走ることも見受けられます。
もちろん、科学的態度、測定可能な指標を持つことの大切さは言うまでもありませんが、「きこえ・ことばの教室」の先生方ともっと交流できて、教育分野の特色ともいえる「長い目で見る」「じっくり育てる」「子どもとその保護者に寄り添う」態度に学ぶことができたら、言語聴覚士(ST)の仕事にも、もっと豊かな広がりが生まれるだろうに、と残念に思うこともよくあります。

2002年に「子どもの発達支援を考えるSTの会」を立ち上げた時、「ST」という名称には国家資格としてのST(言語聴覚士)はもちろんですが、「ことばの教室の先生方」(Speech Teacher)にも多く加わっていただきたい、という願いを込めました。
今も、少数ながら「ことばの教室」の先生にもご参加いただいています。
一部地域では、伝統的に「きこえとことばの教室」の先生方と、病院等に所属する言語聴覚士(ST)が一緒に活動しており、お子さんの利益を第一に考える“連携”がスムーズに行われています。
子どもの発達支援にかかわる言語聴覚士(ST)は、もっと地域や学校と仲良くなり、自分たちの専門性を提供することを通じて、子どもさんと保護者の幸せを実現する方向を模索したいものです。

さて、私たちの会は長い間「子どもの発達支援を“考える”STの会」の名称のとおり、“考え”たり、学んだりすることを大事にしてきました。
でも、「人生を通じて」「一貫した支援」や、多職種、多分野の「連携」、地域での協力体制づくりが一段と大切になって来た今、“考える”だけではなく、STの社会的役割を自覚して外に向かって発信し、連携を進める活動に踏み出すべき時期が来たようです。

いきなり大きなことができるとは思えませんが、新しく運営委員に手をあげて下さった多くの方たちのお力に支えられて、新年度のスタートを切ります。
会として一歩を踏み出すために、ご支援、ご協力のほど、よろしくお願いします。

2022年4月 子どもの発達支援を考えるSTの会　代表 中川信子

2022年1月～3月:コラム

新年明けてから３月までは、このコラム欄を「重要なお知らせ」として、会費徴収システム「会費ペイ」のクレジットカード漏洩事故に関する内容をお届けしておりました。

長期にわたるご迷惑、ご不便、ご心配をおかけして申し訳ありません。